

明治の女性啓蒙家・

羽仁もと子の受けた教育とことば

小田 三千子

1. はじめに

本稿では、羽仁もと子(1873. 明治(M) 6—1957. 昭和(S) 32)の生涯を、主に受けた教育を中心に概観し、社会言語学的な観点から分析する。そして後になって彼女の著作に見られるようになる、彼女の教育観および思想の発端となるべきものを探る予定である。別の言い方をすると、日本近代文学の一部に位置づけられる女性雑誌の主催者兼記者として活躍した女性の文体形成の一端を調べることになる。

羽仁もと子に筆者が興味を抱いたきっかけだが、母方の義理の伯母が自由学園の卒業生、その子供3人が同学園の在校生だった関係で、幼い頃から、「ミセス羽仁、ミスタ羽仁、節子先生、恵子先生」というように、伯父一家が同学園関係者を親しく呼んでいるのを聞いた。また、その一家の家庭教育の仕方が、他の伯父・伯母宅の家庭教育と少し違いがあるようにも思われた。筆者は、婦人之友社の出版物や雑誌『婦人之友』を講読する時期を経て、後に京都のある国際研究センターの共同研究員として「大正期総合雑誌の学際的研究」に参加する機会を与えられた。その後、個人研究の対象の一部として筆者が「羽仁もと子」、『婦人之友』、「自由学園」を取り上げるようになったのは、自然の流れのように思われる。

羽仁もと子は、日本最初の女性新聞記者といわれ、明治、大正、昭和にかけて活躍した女性啓蒙家・教育者として知られている。もと子は、まず生地である現在の青森県八戸市および東京で伝統的な教育を受け、後に明治女学校でキリスト教に基づいた進歩的な教育を受けた。

2. もと子の誕生と家庭環境⁽¹⁾

もと子は、1873（明治6）年9月8日に青森県八戸の松岡家に、一人娘美和とその婿養子登太郎の長女として生まれた。登太郎は後に離婚して、松岡家を去った。戸主はもと子の祖父、松岡忠隆で、もと子にとって常に父親役（father figure）となっていた。

もと子は中流知識階級の家族の出であった。祖父忠隆は小南部藩の士族で、『朝野新聞』を愛読するかなりのインテリだったと考えられる。父登太郎は免許代言人（今の弁護士）であった。また祖父の後妻である丹野きよの義弟は、八戸地方の自由民権運動家で、『東奥日報』の創刊に関与し、ギリシャ正教会で受洗したクリスチャンだったと言われる（斉藤 1988：10）。

3. もと子の育った階級と言語使用

八戸では、東北弁の一種である八戸弁が話されていた。もと子は東京で勉強するために八戸を16歳で離れている。八戸および盛岡で数年教職についた期間を除いて、もと子は常に東京に住んでいた。しかし彼女は八戸弁のアクセントを一生保持していた。

もと子とその夫羽仁吉一の創設した自由学園の複数の卒業生に筆者が数年前に面接したところ、もと子の公式のスピーチが分かりにくいので、終わるとすぐに、文章化したものが生徒に配られ、話を理解する一助にしたとのことである。60歳代の卒業生の一人によると、「自分が疎開から学校に戻ってきたら、ミセス羽仁（もと子）の話が分かりやすくなった」とのこと。また、東京の山の手言葉を元に作られた標準語に見られる「女性言葉をミセス羽仁は決して使わなかった」そうである。

筆者は、もと子の80歳のお誕生会の席上でもと子がした挨拶を録音したテープを自由学園図書館で聴く機会があった。その話し方は、筆者が現在住む仙台でよく耳にするお年寄りの話し方と似たような言葉遣いとアクセントであり、筆者には問題なく理解できた。筆者は東京に生まれ、その近郊で育ったが、仙台に来て約30年になるので、この地方独特の話し方に自然に聞き慣れてきたのだと思う。自由学園の生徒がもと子のスピーチを理解できなかった

た原因は二つあると思う。一つは、生徒が日本語の多様な方言（社会言語学でいう変異形）に十分ふれる機会がなかったこと。もう一つは、東京で使われる標準語を身につけることにもと子が興味を持たず、八戸弁を堂々と使った点である。現代の視点から見ると、もと子の姿勢は独特に思われる。なぜならば、社会言語学の最近の研究では、東北地方に住む若者の話し方に東京志向があることが指摘されているからある。

4. もと子が受けた教育

4.1 八戸小学校（もと子の在籍年：1879、M12-1889、M22）

もと子は、1979年に八戸小学校に入学した。当時は初等科4年、中等科2年で、男女別々に分かれて男校女校となっていた。もと子が中等科に進んだ時、中等科には、男子25、6人に対し女子は5、6人に減っていた。彼女は更に高等科に進み、ただ1人の女生徒として高等科2年の課程を終えた。

もと子は幼児から頭脳明晰で、何事も納得のゆくまで考える性質であった。1884年に全国の小学校の特に優秀な子供が選ばれて表彰された時、八戸小学校から選ばれた3人のうちの1人であった。頭を使う学科には優れていたが、手先はいたって不器用で、図画や裁縫には苦しめられた。音楽の才能も無かった。詰め込み主義への不満や、自分の才能のアンバランスに苦しんだ経験から、後のもと子独特の教育観が築かれることになる。

もと子が小学校教育を受け始めたのは、男女別学に基づく新しい「教育令」が發布された1879年のことであった。この教育令は、男女平等の考えに基づく1872年に制定された「学制」への反動であった。従って、もと子は、伝統的な女子教育を受け、教科には裁縫、家政、唱歌、音楽、作法などが含まれていた。生徒は、学校で男女別の社会的役割を学んだことになる。

4.2 府立第一高等女学校（1889、M22-1891、M24）

1889年に、もと子は希望がかない、東京の築地に新設された府立第一高等女学校（男子の旧制中等学校に相当）の2年前期に入学を許され、2年後にそこを卒業した。その当時第一高女の修業年限は3年であった。高等小学校

を卒業した人も入れるからであったようだ。1年を2期に分けて、1年前期1年後期といい、半年毎に卒業生をだすことになっていた。二つの要因が彼女の東京での進学の後押しをした。一つは、八戸地方にまだ民主主義的な風潮が残っていたこと。もう一つは、もと子が学問に向く資質を持っていることを、祖父忠隆が見抜いていたからである。

第一高女でもと子は伝統的な女子教育、即ち究極的には、国家に必要な良妻賢母を養成するための教育を受けた。しかし、もと子がかねて愛読していた『女学雑誌』の情報やクリスチャンの級友との交流に触発されて、学校に近い築地明石町の教会に通い始め、1890（M23）年に17歳で小方仙之助から洗礼を受けた（斉藤 1988：17）。

この年に「教育勅語」が出された。これは、日本の伝統的な女性観に基づく女子教育を推進するためのものであり、鹿鳴館とダンスパーティーに象徴される明治初期の行きすぎた欧化主義に対する批判を示していた。

4.3 明治女学校（1891、M24-1892、M25）

もと子は『女学雑誌』（1895、M28-1904、M37）を講読していた関係で、明治女学校（1885、M18-1908、M41）のことも知った。同校は東京麹町に設立された私立女学校である。キリスト教主義に基づく近代的な教育により、明治・大正期に社会的に活躍した多くの女性を産んだ。火災後巣鴨に移り、1908年に廃校になった。もと子は同校で学ぶことを希望した。しかし私立である同校の授業料は高く、祖父に支払いをととも頼めなかった。その代わりに、彼女は第二代校長の巖本善治に自分の状況を説明する手紙を出した。その結果、彼女は授業料免除の奨学生として入学を許され、宿舍費と食費は『女学雑誌』の校正をして得られる収入から支払うことになった。

もと子が明治女学校に在籍した期間は1年数ヶ月足らずであったが、彼女は生徒として、また雑誌の校正係りとして巖本善治から大きな影響を受け、雑誌に寄稿する有名な作家達を知ることにもなった。明治女学校と『女学雑誌』は相補関係にあった。巖本の考えは組織だって雑誌に紹介され、女学校で実行に移され、その結果は雑誌に報告された。後にもと子は巖本と同じや

り方をとりいれる。即ち、彼女は自分の教育観について『婦人之友』に書き、自由学園でそれを実行に移し、その結果がまた雑誌記事として報告された。学園も雑誌ももと子と吉一が創立したものであった。

斉藤（1988：20）は、巖本善治の研究者である井上輝子の説を紹介し、以下のように述べている。『女学雑誌』の思想が創刊以来三つの時期（初期、転換期、後期）に区分されること。そしてもと子が在学した転換期には、巖本善治は毎週一回、高等科生に彼の思想の中核と言われる「女学」を講じていたこと。この中で巖本は、女子教育が如何にあるべきかの実地問題に加えて、女性の天職いかにについても考究することが必要としたのであった。

同じく斉藤（1988：20-21）によれば、巖本は、男女異質であるが故に女性に存在意義があると見たから、女権論にはくみしないけれど、女性本分論をもって女性を家庭に閉じ込めることにも賛成しなかった。男女は本来異質だから、政治学問の分野に自由に女性を入れても、自ずと男性と異なる結果が出るだろうと考えた。また教育とは人の天性をのばすことであるから、女子教育も婚姻のための準備教育であってはならない。しかし男女同一の教育を行うことではなく、「母妻たらしむることをもってその天性を開発する」（『女学雑誌』207号）と考えた。ただし、ここで言う母妻には、一人のための母妻、一国のための母妻、世界のための母妻があり、どのような母妻になるかはその人の器によると述べている。また巖本は、家庭をホームと呼び、彼のホーム論は初期に発表されたが、この時期にもその主張は変わっていない。巖本は、「妻は夫と共に一事業に働くの人なり」といい、妻は夫の朋友であり半身であるとして、ホームにおける女性を男性と同等と考えていた（『女学雑誌』224号）。

もと子は、巖本の思想を継承しつつ、自らの経験を通してそれを更に発展させていくことになる。彼女も男女異質論に立ち、女の頭と手が社会に生かされるべきだと考えた。また女の活躍する場所は家庭が第一であるとはいえ、神はそれぞれの力に応じて、持ち場を与えられるだろうと説いている（斉藤1988：22）⁽²⁾。

明治女学校がもと子に及ぼした影響は大きかった。もと子は明治女学校か

ら思想面で多くのことを吸収したばかりでなく、教育面でも学生の自治組織など生活に即した運営に感銘をうけている。また内村鑑三の教育勅語事件以降に『女学雑誌』が掲載するようになった家政記事からも多くを学んだことであろう。巖本の使いとして多くの名士に会ったことも、後に自ら雑誌を編集する際に大いに役立ったことと思われる。

明治女学校を去ってから、もと子は、青春時代に、郷里の小学校および盛岡女学校に教師として奉職したが、その後、恋愛、結婚、半年で離婚を経験した。東京に出て、女中や事務員の仕事を経て、報知新聞に入り、校正係から取り立てられて正式の記者になった。日本最初の婦人記者といわれている。離婚して東京に出てきてから半年後という短い期間に変身を遂げたのである。

5. まとめ

上述したように、羽仁もと子は、伝統的な教育を八戸および東京で受けた。また伝統的な考えも折衷されているものの、キリスト教に基づいた進歩的な教育を東京の明治女学校で受けた。これらの教育が核となって、愛読した『女学雑誌』や、高等女学校時代に多読した日本の古典文学から思想や表現を吸収し、もと子の文体の母体が形成されたと思われる。本稿では扱わないが、もと子の初期の著作に見られる文体を分析すると、伝統的な教育の影響も示すものの、進取の教育観が鮮明に読み取れるものがある。後に世の移り変わりと共にもと子の文体に変化が見られる時期もある。

しかし、もと子と夫の吉一が創刊した『婦人之友』誌は2003年に創刊100周年を祝い、その読者の会である「友の会」や、やはり羽仁夫妻の創設した「自由学園」と共に、もと子の教育観・思想は綿々と現代に受け継がれているのである。キリスト教精神に基づき、「思想しつつ生活しつつ祈りつつ」を標語として、自治と労働を基調とする教育——これが、もと子が『婦人之友』で論じ、自由学園で実験した教育である。

注

- (1) もと子の生涯の前半に関する情報は、特に『羽仁もと子著作集』第14巻「半生を語る」(1928)によっている。彼女の全生涯については、斉藤道子(1988)を参考にした。
- (2) 斉藤(1988)によれば、もと子の入学少し前、1891年1月に、内村鑑三の教育勅語不敬事件が起きている。『女学雑誌』は堂々の論陣をはり(251、253号)、御真影礼拝、勅語奉読は「迷妄の観念を養ひ、卑屈の精神」に慣れさせる弊害があるのではないかと問うている。

もと子は自伝ではこれについて全く言及していない。当時の彼女にとって関心から遠い事件だったのであろう。斉藤(1988)はさらに続けて以下のように述べている。「しかし、ここで当時のキリスト者が、皇室への忠は当然、クリスチャンでも不可ならずとして、国家と宗教の問題をそれ以上に深めようとしなかったことは、もと子のキリスト教と国家の関係の理解にも影響していると考えられる。この教育勅語事件は、勅語を通じて国家権力の国民思想介入が強化されたことの一つのあらわれであった。『女学雑誌』の主張そのものは、この事件後も当分は変わっていない。しかし、既に241号(1890・11・29)から主筆に清水紫琴をすえ、家政記事を加えている。もと子が明治女学校に入学した時期の『女学雑誌』は、思想的にみてこのような微妙な転換期にあったのである(斉藤 1988: 23および第八章)。」

歴史上の事実を論じるさい、当時の人達がどう考えていたか、十分に調べる必要があると、本稿の筆者は考える。

参考文献

- 青山なを(1970)『明治女学校の研究』東京：慶応通信。
婦人之友社(2003)『読者と歩んだ一世紀展』東京：婦人之友社。
片山清一(1984)『近代日本の女子教育』東京：建白社。
斉藤道子(1988)『羽仁もと子——生涯と思想』東京：ドメス出版。
羽仁もと子(1927-1983)『羽仁もと子著作集』全21巻 東京：婦人之友社。

(おだ みちこ)